

1. 前回宿題

①「五千起去」『方便品』77頁②-38

・増上慢

「是れ当機に非ず、結縁の人。大経（涅槃経）の時萬五千億人の中」

涅槃経で成仏 涅槃経は法華経の拈捨経

過去に法華経との結縁はなされているが当機（今、法華の会座）ではない。かえって罪を犯す。『法華文句』（10-25-右）

・『譬喩品』124頁③-119以降の所説に該当する衆生。

②「有る人」『譬喩品』118頁③-93

・後説

2. 前回確認

※舍利弗が釈尊を師と仰ぎ信じて修行して来た→不成仏の烙印が押されてしまった→

心が折れる→法華経に依って蘇生→法華経『方便品』を聞いての覚醒→

①自分の早合点 ②私もぼさつ ③私の役目

→その覚醒の内容を釈尊が代弁→「三車火宅喩」（三乗総てが対象）→三乗即一仏乗

※舍利弗の領解とは

教えが解るということは己の罪に気付くこと。罪に気付いた時、同時に釈尊の慈悲が解った。同時に釈尊への大恩を知る。これ「知恩」。知ったならば報いにはいられない。これ「報恩」。その行為が「報恩行」。

その中味「仏の声を聞かせる声聞」これ舍利弗の「ぼさつ行」

※104頁③-43・44

「世尊、我れ今疑悔無し～千二百の心自在なる者～未だ聞かざる所を聞いて皆疑惑に墮せり。善哉世尊願わくは四衆の為にその因縁を説いて～」

※「述成」舍利弗の領解に対しての追認。釈尊が舍利弗の領解を再度釈尊の言葉で語る。

・譬喩品冒頭から語ってきた舍利弗の悟りと懺悔譚を舍利弗に替わって釈尊が説く

3. 本日拝読箇所

※法華経の譬喩譚は総て「父子関係」で述べられる。

理由はインドは実子相続、養子は成立しない。法華経は歴史に忠実である。

ここから「仏種」思想も生まれる。

「三車火宅喩」理解のポイント

1. 内容の不自然さ

・何故父親は火宅に飛び込んで子どもを助け出さなかったのか。保護責任者遺棄罪。

2. 不自然な描写の裏に込められた真実とは

・舍利弗の悟りと懺悔を釈尊が舍利弗に替わって語る

「ここまでお釈迦様があの手、この手を駆使して私たちに救い導きだそうとして下さっていたのに、全く気付かず好き勝手な事をしていた私たちに何卒お許しください。そんな私たちを決して見捨てることがなかったお釈迦様。なんとお礼とお詫びを申し上げればよいのでしょうか」

上記の言葉を補いながら三車火宅喩を読むと不自然さが解消される。

105頁③-46～

・三車火宅喩は舍利弗の悟りと同時に懺悔談。それを釈尊が舍利弗に替わって説く。

106頁③-48

・我よく此所焼くの門より安穩に出ることを得たりといえども、しかも諸子等、火宅の内において嬉戯に樂著して、覺えず知らず、驚かず怖じず。火来たって身を逼め、苦痛己を切むれど、心厭う患せず、出でんと求むる意無し」

107頁③-50、51、52

・「亦復何者かこれ火、何者かこれ舎」

当に顛倒の状態

108頁③-53

・「時に諸子等、おのおの父に白して言さく～願わくは賜与したまえ」

※一言くらいお礼を言うべきであろう。これぞ顛倒の極み。危機にあったことも知らない。

この裏には舍利弗の深い深い懺悔あり。「なんと脳天気」「なんと愚かだったのでしょ

うか」  
・「軽に普通車になれ。普通車に高級車になれ」と言うのではない。その姿のまま役目を果たせ

115頁③-82

①三車火宅火宅喩偈頌にて再説

初説以上に詳細に語る。その狙いは

②「有る人」『譬喩品』118頁③-93

※仏の耳を通して見る。聞即見。但し聞くという行為は第三者の声をを通さなければなら

ない。ここでは釈尊の法身つまり智慧を通して様子を見知する。  
よって答えは釈尊自身

『法華文句』（16-8-右）に解説

「上は見を明かし、今は聞を以て見に代う也。聞は必ず他に従う。門外立つとは正しく上の我能く所焼の門 安穩に出得ての頌すなり。立つとは法身地に在って常に大悲を懷いて衆生を救わんと欲す」

※三車火宅喩は偈頌で二回語られている。

「上は見を明かし」一回目46～81 仏眼を通して見た三界の様。

「今は聞を以て見に代う也」二回目82～ 仏耳を通して見た三界の様。

そのねらい。映像に音声が入る事でリアリティーが増す。

第一段の火宅喩は映像のみしかし、第二段の火宅喩には音声加わる。

映像と音声により火宅の情景がダイレクトに伝えられる。

「壮絶さの極地」

※他經典には見られない経説。こんなこと經典に載せていいのか、とまで思う。

法華經は娑婆のむごさを描く。浄土教はそこには全く触れず、ただ極樂の樂土たる情景を述べるのみ。

源信の『往生要集』

124頁③-119～最終

※「勸信流通段」

法華經信の功德と不信の墮地獄を明かす

（結び） 法華經は懺悔の經。

・「三車火宅喩」、「長者窮子喩」在世仏弟子の懺悔談

「良医治子喩」滅後の衆生の懺悔談

・根底は寿量品で明かされた仏の大慈悲 「見守る心」「信じて待つ心」